

トピックス 野外太極拳へ参加

10月10日(土)、台東リバーサイドスポーツセンター陸上競技場で、穏やかな秋空のもと、約270名が参加して野外太極拳が開催されました。瑞江鶴の会、東大島鶴の会、亀戸SC教室、また所属す



る清新鶴の会(蒔澤徹師範指導)からも有志が参加して楽しく交流してまいりました。小生は80歳以上の参加者約30名の先頭に立って演舞させていただきました。当日の様子を蒔澤師範撮影の画像でご紹介いたします。

亀戸SC『のびのび太極拳』開催

江東区亀戸スポーツセンター主催の「体育の日無料イベント」の一つとして『のびのび太極拳』が10月13日(月)に同所で9時30分から開催されました。あいにく台風19号の接近による悪天候が予想されたため、出足が鈍りましたが、それでも、まったくの未経験者5人をふくむ約20人が参加して、1時間半にわたり太極拳を楽しんでいただきました。



11月23日に江戸川区総合文化センターで太極拳体験会を開催します

江戸川サークル連合会(会長・廣田順子氏)は江戸川区総合文化センター(江戸川区中央)で、11月21日(金)から24日(月)にかけて第38回となる『サークル連合発表会』を開催する予定ですが、その一環として以下のとおり“健康太極拳体験講習会”が初めて折り込まれました。ご近所の方はふるってご参加ください。日時; 11月23日(日・祝)午後2時~3時45分 会場; 同所2階会議室

参加費; 無料 講師; 茶木登茂一

閑人閑話 武当山は太極拳発祥の地か?

ご覧になった方も多いかと思いますが、さる8月10日(日)の夜9時から2時間、『奥田瑛二の鉄道とバスの旅~世界遺産少林寺カンフーの聖地へ』という番組がBS5チャンネルで放映されました。番組前半は嵩山少林寺とその武術修行の様子を映したものですが、後半は武当山を太極拳発祥の地であるとして、その修行の様子とともに、道教の聖地武当山の神秘的な魅力を紹介していました。太極拳は武当山の道士か仙人の張三豊が創設したとの説にもとづくものですが、たいへん違和感を覚えました。

というのも、太極拳の起源については諸説がありますが、少なくとも1970年代においては、張三豊が太

極拳を創設したという説は“武術学界では普通この説は神話的色彩の濃い伝説とみなしている。…根拠のないものであり、張三豊（峯）が造拳したという伝説は…ずっと懸案状態(取り上げられない案という意味)のものである。(李天驥先生著・『太極拳の真髓』P27)”というのが中国政府国家体育总局の正式見解であったと思われます。

さらに言えば、武当山には、古来「武当派武術」というのが伝承されていたことは確かですし、かつ中国全土の道教の道観(お寺)でも同様でした。たとえば、日中戦争終結後の1951年、天津市で開催された武術表演会で、特別ゲストの李天驥先生は“武当剣”を演じて絶賛を浴びたと、同著P275で書き残しておられます。(ちなみに李先生はこれがきっかけとなってやがて北京に呼ばれて国家体育总局で働くようになり、中国武術界のトップに立たれるようになるのです。)

また、日本人馬賊・小日向白朗の『馬賊戦記』には、東北地方の道教の拠点「千山・無量観」における“武当派拳法”の修行の様子(1924~5年ごろ)が詳細に述べられています。(北地域・『流水』第20号にて紹介しました。)ですからこのころの武当山の武術を決して太極拳とか太極剣とか呼んではいなかったことは明白な史実なのです。

それが現在どうして太極拳の発祥は武当山であるという説がまかり通るようになったのかについては、太極拳流派の間での本家争いという問題と、道教が中国共産革命、さらには文化大革命の中で受けてきた仕打ちとその反動という問題と、二つの要因が有ったことなのです。

武禹襄による1852年の太極拳経の発見によって、それまで綿拳とか綿軟拳とか呼ばれていた楊露禪の拳(陳家溝で習った十三勢套路をもとにしたもの)を「太極拳」と命名した、というのが一応の通説です。その後、辛亥革命を経て1910年代から北京や大都市を中心に、まず楊式太極拳が普及していったのですが、あらたに陳家16世の陳鑫が1920年に「陳式太極拳図説」を出版し、また17世の陳発科が1928年に北京に出てきて普及活動を始めるなど、陳式こそ太極拳の元祖、本家であると主張したわけです。これに対して、楊露禪の孫の楊澄甫は、彼が1934年に出版した「太極拳体用全書」のなかで、あえて“太極拳の元祖を武当山の仙人、明代の張三丰(ちょうさんぼう)までさかのぼる”と唱えたのです。【この項は「中国雑話 中国的思想」(酒見賢一著・文春新書)からの引用です。】

また、陳家溝の隣村趙堡(保)鎮で陳式太極拳を継承していた一派がのちに、あえて趙堡(保)拳を名乗るようになるさいにも、張三豊～王宗～将発～ というような太極拳伝承ルートを主張しました。

中国武術研究家の松田隆智氏の『少林拳と太極拳 中国武術』によると、“張三丰は三峯とも三豊とも書かれるが、北宋時代の人物と、明時代の人物と二人いていずれも武当山の道士であり、しばしば混同されていること”、さらには“太極拳の技法が道家の導引吐納の法に合致することから、少林拳の修行者が禅宗の達磨大師を始祖としたのに対抗して、(太極拳の始祖を)道教の張三丰に仮託したのではないだろうか?”と推断しております。 【右; 武当山】

肝心の武当山側の主張はというと、これは至極新しいことなのです。というのも、道教は、共産党政権になってから、人民大衆の旧思想改造の標的となり、宗教活動も禁止状態になり、かつあの文化大革命時代には、さらに手荒な迫害を受けていたのです。



風向きが変わったのは、鄧小平による1978年から強力に推進されてきた改革開放路線への転換以降です。道教などの宗教に対する締め付けも緩み、また市場経済へ移行する過程で各省の自主的な活動が盛んになり、観光や文化財保存などにもそれぞれ力が入られるようになったのです。このような流れのなかで、

武当山の道教古建築群が1994年に世界遺産に登録されました。これを契機にして、道教の本山としての、また観光資源としての武当山はにわかに注目を浴びるようになったのです。

また、張三丰（豊）も、武当山開山の始祖として、あるいは武当派武術の先人として喧伝されるようになりました。古くは1993年の香港映画で「太極・張三峯」がありましたし、2001年には中国では「少年・張三豊」という連続テレビ映画・全40話が大ヒットしたそうですし、これを子供向けアニメとしたテレビもたいへん人気があったようです。日本でも武当山を舞台としたドラマ、『グリーンデスティニー』（2000年）や『ベストキッド』（2010年）が上映されたり、テレビで放映されたりしています。こうした中で、あたかも武当山が太極拳発祥の地であるというような風潮になってきてしまったということのようです。

たしかに、あの陳家溝の寒村（失礼！）の、宗師陳家の、ごく普通の民家の庭先で演じられる太極拳よりも、霧や雲をまとう深山幽谷の武当山で演じられる道服をまとった道士たちの太極拳の方が、いかにも神秘的で、本物っぽく！？映る、あるいは素人受けする、ことは確かです。

太極拳発祥の地の虚実はさておいて、私も一回ぜひ訪れてみたいと思っている武当山ではあります。

さこうべん 左顧右眄（再開） 【第17話 漢詩に学ぶ・漢詩を楽しむ】

第3回 田園詩人「陶淵明」のこころの深淵

今回は田園詩人とも隠逸詩人とも後世呼ばれた陶淵明を取り上げました。もっとも有名な詩は、「帰去来の辞」でしょうか。“帰りなんいざ 田園まさに荒れんとす なんぞ帰らざる”で始まる、故郷へ隠遁する決意を述べた全文340字から成る長詩です。また散文ですが、究極のユートピアを描いた「桃花源記」もまた彼の代表作の一つです。

彼もまた無類の酒好きで、連作『飲酒二十首』はじめ多くの詩に酒を詠っていますが、とくにその『飲酒二十首』の“その五”が万人に親しまれている名句ですので、ご紹介します。

「飲酒二十首の五」

結蘆在人境	蘆（いおり）を結んで人境に在り	
而無車馬喧	而も車馬の喧しき無し	
問君何能爾	君に問う何ぞ能く爾（しか）るやと	
心遠地自偏	心遠ければ地自ずから偏なり	（気持ちが悠々としていれば土地も鄙びる）
采菊東籬下	菊を采る東籬の下	籬；間垣・竹や柴を編んだ垣根のこと
悠然見南山	悠然として南山を見る	
山氣日夕佳	山氣日夕（にっせき）に佳く	山氣；もや 日夕；夕暮れ
飛鳥相与還	飛鳥相いともに還る	
此中有真意	此の中に真意有り	（この中に宇宙の真理がある、道理がある）
欲弁已忘言	弁せんと欲すれど已（すで）に言を忘る	（言わぬが花という意味）

「帰去来の辞」とともに、悠々自適の暮らしに入った清雅な心境を詠い上げた名句とされています。詩中にある南山とは、彼の故郷、潯陽柴桑（現在の江西省九江市郊外）から望んだ廬山のことです。 【廬山⇒】

中唐の大詩人白居易（白樂天）も、南宋の哲学者朱熹（朱子）も、この地を訪れて陶淵明を偲び、かつこの詩にちなむ詩をそれぞれ作っているほどの名詩であるということなのです。

“悠々自適の暮らし”と書きましたが、じつは実態は



大いに違います。生涯彼はまともに働いてはいません。官僚として資産を十分に蓄えて早めに引退して一というのとは全く違うのですね。

というのも、彼の生きた時代は中国史上でも最悪の時代のひとつだったこともあります。200年ほども続いた後漢が滅亡し、その後三国鼎立を経て、魏が再び天下を統一（280年）しますが、301年にいわゆる八王の乱をきっかけに北方遊牧民族が華北に相ついで侵入して多くの国（五胡）を建てました。華北の漢民族の江南地方、あるいは朝鮮半島などへの大移動が始まりました。中国南部もこのために、群雄割拠のいわゆる十六国時代に突入したのです。陶淵明の生きた時代とはまさにこの南北朝・五胡十六国時代であったわけですし、彼自身も南朝の軍閥の間を右往左往しているのです。

再び中国が統一されるのは589年の隋帝国ですから、この混乱時代がいかに長かったかお分かりいただけると思います。

さて、陶淵明は365年に生まれ、427年に63歳で没しています。（同時代の人としては書聖・王羲之（303～361）が有名です）。家柄はよくて、曾祖父は東晋の大司馬（将軍）長沙公陶侃ですし、陶侃の父は三国時代の呉の国の楊武将軍陶丹です。しかし、彼の時代にはすでに、単なる下級士族の一門だったようですが、多少の田畑家屋敷は持っていたことは自ら語っています。ところで、彼の職歴はというと；

393年（28歳）江州祭酒（教育長）として出仕するもすぐ辞任。主簿（記録官）に招かれたが辞退。

399年（34歳）北府軍団・劉牢之の参軍（参謀）となるも、翌年辞任。

401年（36歳）西府軍団・桓玄の幕下（幕臣）として仕官するも、母の喪に就くとして3年休職。

404年（39歳）江州刺史（長官）劉敬宣の参軍となる。

405年（40歳）同年8月彭沢県の県令（県の長官）に就くも、わずか3か月後11月に妹の喪を口実にして辞任。故郷に隱遁。以降定職に就かず、農夫として暮らす。

408年（43歳）屋敷が焼失し、一時船に仮宿する。その後町中に移り、次第に困窮するが、周りの友人知己たちの援助もあり暮らしをつなぐ。 【右；陶淵明像】



ということで、まともに働いた期間はほとんど無いことが分かります。彼の繊細な神経では、領民を相手にする、あるいは上司にへつらうお役所勤めも、軍閥の参謀もとても勤められなかったということだったのでしょうか。それにしても、一族郎党、妻子（子供は5人）は苦勞したと思います。

晩年の作『食を乞う』を富士正晴氏の名訳でご紹介します。まさに彼のこころの深淵を覗く思いです。

食を乞う

ひもじさが おれにみこしをあげさせる どこまでゆくのか知らないが
 行き行きてこの里へ来た 門叩いたが 口はもごもご
 主はおれの心を察し めぐんでくれた むだじゃなかった
 話が合った 日が暮れた 酒が来ればぐいぐい飲んだ
 心うれしや 新しい友 口でうたって ついに詩が成る

「感ジマス アナタノ漂母ノ恩*

恥ジマス ワタシニ韓信ノオガナイコトヲ

黙ッテ受ケマス 言イヨウガナイ

アノ世へ行ッたら オ報イシマス」

*貧窮時代の韓信に洗濯女の漂母が食事を恵み、のちに楚王となった韓信が千金を与えて報いたという故事。